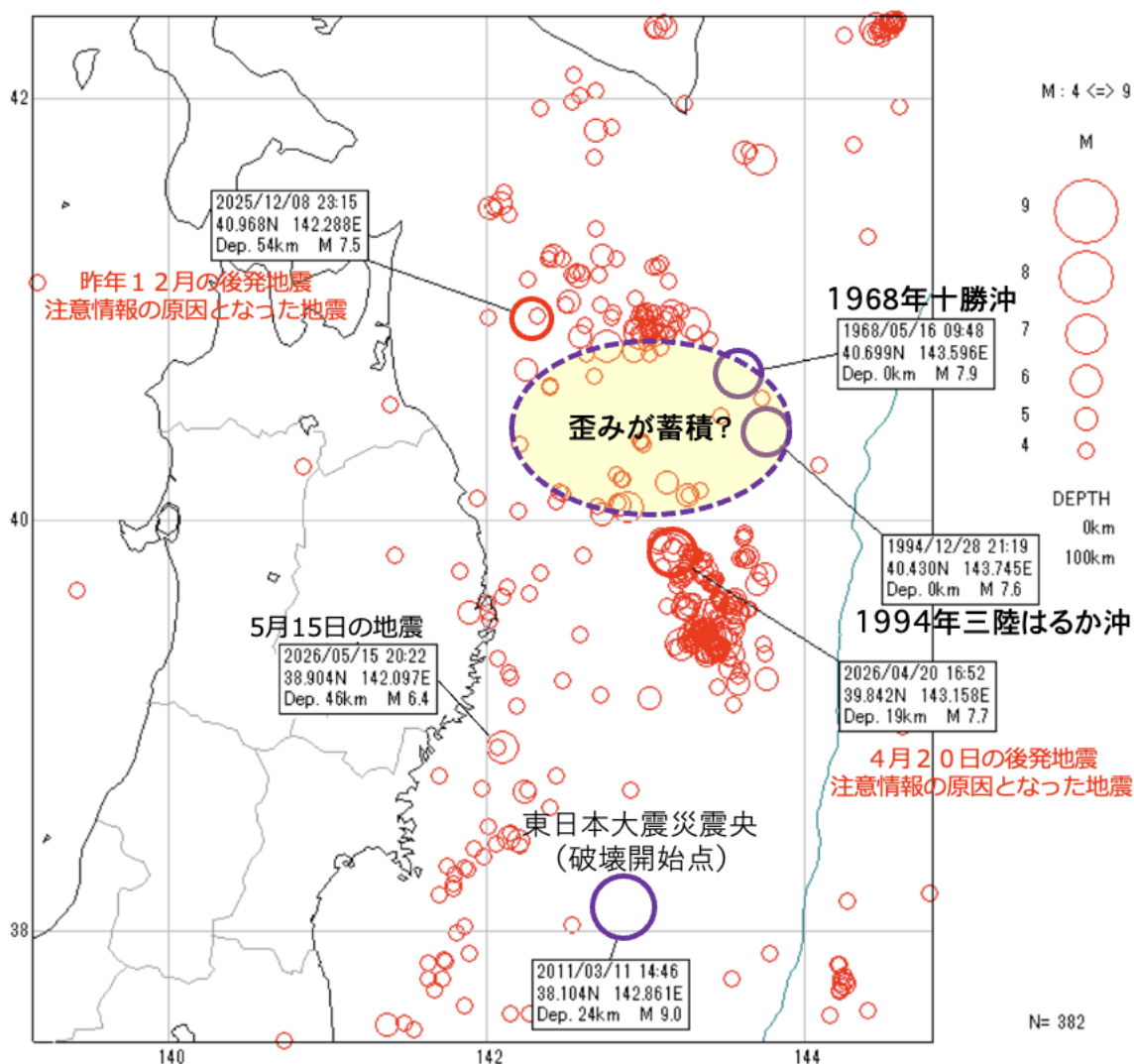


東北沖で歪みの蓄積が進行か

政府・地震調査委員会が5月14日に公表した資料によれば、4月20日にマグニチュード7.7の地震が岩手県沖合で発生した後、震央の東側で微小地震活動が活発になっている事がわかりました。また、非地震性すべり(スロースリップ/ゆっくりすべり)の加速も見られているとのことです。

読者の皆様はスロースリップにより歪みが解消されれば安心と思われる方も多いと思いますが、必ずしもそうではありません。確かにスロースリップが発生した地点・地域では歪みが解消方向に向かっています。ところが、その周辺はまだ固着しており、言い換えると「スロースリップは歪みをある場所から隣の場所に移動させる現象」と言えるのです。

そしてスロースリップの発生が巨大地震につながる事も知られており、実際に過去に起きています。特に2011年の東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)では、2日前に発生したマグニチュード7.3の地震の後にスロースリップが発生、それが本震の破壊開始点に向かって移動したことがわかっています。つまりこのスロースリップが断層の破壊を促進した可能性があると考えられているのです。



最近1年間に発生したマグニチュード4以上の地震と過去の大地震



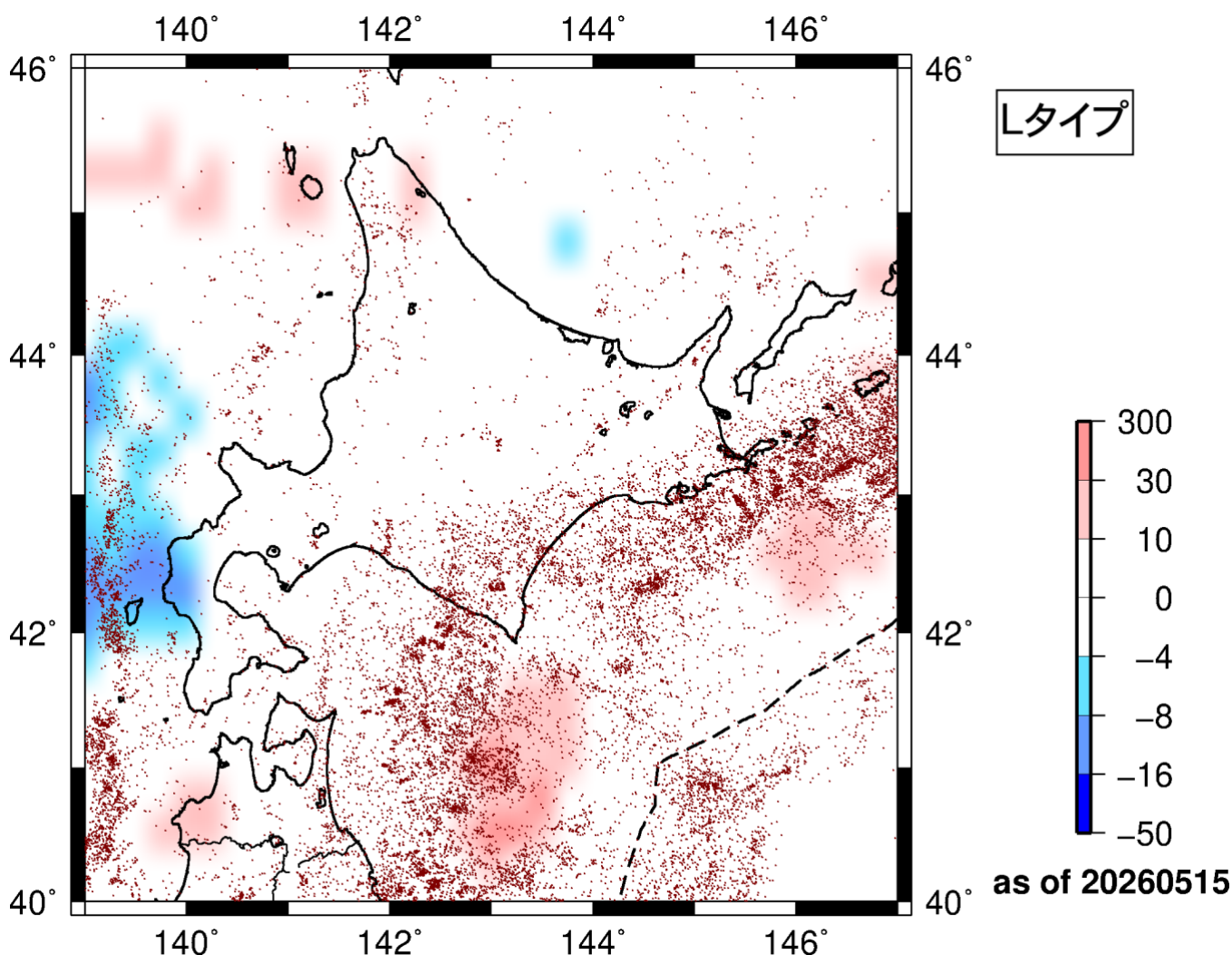
前のページの図は最近1年間に発生したマグニチュード4以上の地震と過去に東北沖で発生した大地震を図示しています。1968年の地震は「十勝沖」と命名されていますが、実際には青森はるか沖とでも命名したほうが良かった地震ですが、当時の観測体制から速報の段階で、実際の震源よりも約50km北側(つまり北海道寄り)の海域で発生したと判断してしまったためです。津波警報の発令など緊急を要する対応に迫られ、当時の気象台が早急に地震の名称を発表する必要があったことから、速報値に基づく「十勝沖地震」という名称がそのまま定着してしまいました。

いずれも後発地震注意情報につながった昨年12月に発生した青森県東方沖のマグニチュード7.5の地震の活動領域と、4月20日のマグニチュード7.7の地震の活動領域の間では1994年に三陸はるか沖地震が発生しています。そして**現在その間の地域では歪みの蓄積が進んでいる**と考えられており、ここでやはりM7後半から8クラスの地震発生の可能性が高まっていると考えられているのです。

北海道および九州の地下天気図®

今週号では4月6日のニュースレターに引き続き、北海道と九州および南西諸島を含む領域の5月15日時点の地下天気図をお示しします。いずれもLタイプとなっています。

北海道の解析では、北海道西方海域での静穏化がさらに進んだ点です。

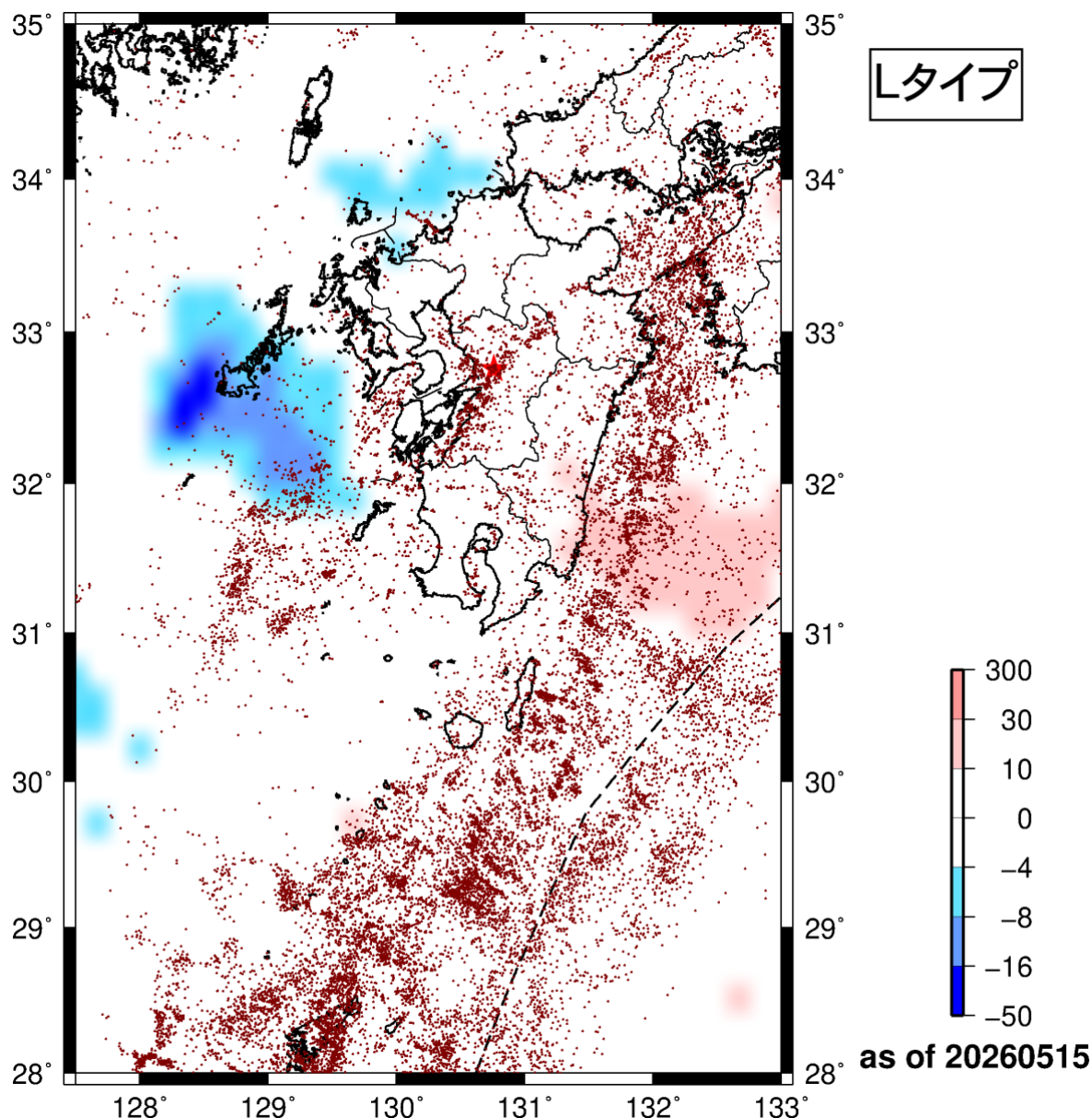




襟裳岬沖合や根室・釧路沖合の赤い地震活動活発化領域は継続して出現しています。

北海道西方海域での静穏化(奥尻島周辺)は4月6日のニュースレターでお示した日本列島陸域の地下天気図でも確認されており、DuMA では今後の推移に注目していきたいと考えています。

次にお示しするのは九州および南西諸島の地下天気図です。前回、福岡県・佐賀県周辺での地震活動静穏化領域は解消傾向とお伝えしましたが、**まだ継続中**という判断にしたいと思います。さらに日向灘を中心とする地域での地震活動活発化は現時点でも続いている事がわかりました。



またこの地下天気図でははっきりとは見えませんが、瀬戸内海の伊方半島北方から愛媛県にかけて、地震活動が活発化している事が確認されています。